

岡倉天心をめぐる人々

—ポストニアンとの日米文化・科学交流

岡倉 登志 (大東文化大学名誉教授)

OKAKURA Kakuzō and Boston Brahmin

Takashi OKAKURA

はじめに

筆者は、大東文化大学東洋研究所の岡倉天心研究班による三冊目の研究成果『天心をめぐる人々』に「新納忠之介（古拙）と岡倉天心—「日本の美と信仰」の発信者—」（5～22頁）を執筆した。本稿では、同書の書評の意味も持たせて（コロナ禍で研究会も開催されない）、筆者なりに意見を開示するつもりである。拙稿については、関連著作を別途準備中であるので、忌憚ないご意見をお寄せください。

『天心をめぐる人々』には拙稿を含めて五本の論文が掲載されており、以下掲載順に論評するが、田辺論文と宮瀧論文が「論評」の主たる対象になる。

1. 岡本佳子「日印にまたがる東洋宗教会議の夢—岡倉覚三の夢と織田得能の般若波羅蜜多会をめぐる宗教者たち—」（23～39頁）は、筆者との共著『岡倉天心 思想と行動』（2013）吉川弘文館に発表した論稿（93～99、156～160頁）をその後のインド調査や学会発表をも踏まえて執筆されたJSP 科研費の成果の一部である。

筆者は、岡本論文のテーマに関心をもっているが、適切なコメントをする立場にはないので、近いテーマで、北インド（ベンガル）で社会人類学的研究をされている東京外国語大学外川昌彦教授の最近の研究成果⁽¹⁾と稲賀繁美氏の研究「ジョセフィン・マクラウドとシスター・ニヴェディータ」平川祐弘編『異国への憧憬と祖国への回帰』明治書院、2000」、後述される『絵画の臨界』所収論文及び『岡倉天心—伝統と革新』の岡本論文「仏教をめぐる同床異夢の旅路—岡倉覚三とスワミー・ヴィヴェーカーナンダの出会いと別離」を参照し、以下の一点のみを指摘しておく。

本書 25 頁 3～6 行目は、評者未見の岡本による英文論文からの引用のようである。

「織田が構想したのは万国宗教会議ではなく、「印度（ヒンズー岡倉補足）教と仏教との研究会」という規模のものであった」。

これは1902年7月以前の織田の構想と思われるが、『岡倉天心 思想と行動』94頁には、「1902年3月に織田が岡倉のいるカルカッタを訪ねて来ると、ヴィヴェーカーナンダを日本に招待する話は宗教会議開催の企画へと発展する」とある。

1「岡倉と織田、宗教会議に込めたそれぞれの思い」の冒頭(24頁要約)には、「1901年暮れに岡倉がマクラウドと若き僧侶堀至徳とともにインドへ出かけた経緯や個人的理由、翌年3月に織田がかれらのいるカルカッタを訪ねてきたことはすでに知られている」とある。確かに1901年のマクラウドの動向に関連して、コビラがインド人であることも分ってきたが、稲賀氏も紹介していないマクラウドの1901年10月30日と31日付けでロンドンのサラ(オリ・ブリ夫人はヴィヴェーカーナンダのスポンサー、1902年のカルカッタで出会って以来、天心とは日本、ボストンと親交があった)に宛てた手紙には、マクラウドが岡倉、織田のインド行きの仕掛け人であることが推測される。

Since Swamiji did not come to Japan Mr.Okakura is thinking of going to India for two months but as the Committee of the Restoration of the Old Temples may not take place till early December.So I would rather postpone sailing a week or ten days, (この後は堀や天心と航海できる喜びについて)

サラがマーゴット(ニヴェディータ)と一緒にいけるか不明だが、in November,with your practical touch,get things somewhat running before I get there.

岡倉氏はあなたの好きなボース博士と似ていて、西洋主義の気質がなくて、東洋的な意味でも gently です。日曜日に7人のヒンズーの少年たちと織田夫妻と子息ら全員16人でヒンズー式のランチョンを催し、11時から7時半まで楽しみました。

書面からは「ヴィヴェーカーナンダのラーマ・クリシュナのアジア地域でのネットワークの拡張とその中核としての日本という構想があり、マクラウドはエイジェントであったのでは?」という推論も立てられる。

2. 篠永宣孝「天心岡倉覚三の美術芸術論— 絵画東西美術の融合—」(41~53頁)

フランス植民地の経済研究が専門である篠永はロダンの弟子で彫刻家カミーユ・クローデルの弟で外交官のポール・クローデル研究から天心にも関心を抱いた。研究班スタート以来、三冊の成果のみならず、『東洋研究』にも意欲的な論考を執筆している。産業革命と美術(芸術)論をウィリアム・モリスと天心を比較した論稿も精力的であった。

本稿は、東大時代にフェノロサからヘーゲルを学んだ天心が東洋と西洋を弁証法的方法で理解しようとした点に焦点をあてている。モースの再来日直前(1882年5月14日)の龍池会におけるフェノロサ講演「西洋絵画に対する日本画の優位性」の主張が日本全体に国粹主義を広めた(44頁)が、天心覚三は西洋排斥主義ではなく、日本美術院における日本画革新運動の進展に繋げ、その本来の理想には東西融合の精神が垣間見られたと論じている(46頁)。

山口静一先生が1982年に上梓された『フェノロサ—日本文化宣揚に捧げた一生』二巻本、三省堂は、コロンビア大学博士論文(1989) Ernest Francisco Fenollosaにも引用されているが、篠永論文

44頁第二パラグラフは、山口（上）178～9頁が引用されている。178頁記述には、講演から半年後に刊行された『美術真説』は、フェノロサ講演の記録ではなく、大蔵省から出向して来た大森という官僚による抄訳で、フェノロサが当時の保守派に利用され、「『美術真説』の訳者は殊更に日本画の長所のみを強調した」とある。173頁には「この龍池会演説以降、フェノロサは熱烈な伝統美術の旗手、洋画排斥の急先鋒として彼自身があずかり知らぬ間に有名になり、高橋由一に絶交された」とある。

篠永は、『岡倉天心—明治国家形成期における「日本美術」』で筆者が発表した「明治期における東西文化融合—岡倉覚三（天心）にとっての東と西」の12～16頁を参考にされ、鑑画会が東西両洋のなかでよって立つ立場を検討した講演についても言及している。すなわち、フェノロサが「日本主義」的結論を出したのに対し、覚三は「西洋論者でもなく、日本論者でもなく、東西美術の折衷論者でもなく、自然発達論者であるべしとしたのである。これこそが覚三の説く真正の立場にはほかならなかった」（46頁）。⁽²⁾

1887年11月の講演「鑑画会に於いて」に関して、西洋美術史の第一人者の高階秀爾氏は岡倉天心全集5の月報に「それまで、思想的にはフェノロサと一心同体であった天心がこの演説ではじめてフェノロサと微妙な差をみせた」とされているが、「フェノロサと一心同体」であった時期について篠永は1国粹主義者・岡倉覚三（42～5頁）では、佐藤道信『明治国家と近代美術—美の政治学』吉川弘文館も参考にされたが、岡本佳子「明治に生まれた「美術」をめぐる政治—青年官僚岡倉二分の覚三と明治10年代の美術奨励」は参照されなかったようだ。

2 日本美術院設立と日本画革新運動—岡倉天心の美術芸術論は、論文タイトルに含まれているし、大切な部分である。したがって、九鬼隆一がパリ万博に出展する*L'Histoire de l'art de Japon*の編集委員を天心から福地復一に代え、「日本はアジアの博物館」という立場から国粹的立場に変更されてしまったこと、あるいは日本を他のアジアの上に置く史観が目立ち始めた点に言及して欲しかった。（前掲の佐藤著書でも言及。稲賀繁美「官製『日本帝国美術史』の誕生」『図書新聞』1998年3月14日は簡潔で視点が明確）。

43頁にある今泉勇作は雄作（1850～1931）である。フランスのリオンとパリに長く滞在した人物で、茶道の大家。東京美術学校や帝室博物館では、覚三の片腕として美術行政に携わっていた。京都美術工芸学校校長時代の1882年にモース、フェノロサ、ビゲロウの案内をしている。これに関連して、冒頭41頁の「覚三がモースの通訳をした」が誤った情報によっていたことは、宮瀧論文で後述するので、鑑画会の明治15年の連続講演の通訳が有賀長雄⁽³⁾であったことのみを指摘しておきたい。45頁の五性田義松も、五姓田のミスである。

3. 田辺 清「矢代幸雄と岡倉天心」（55～63頁）

「はじめに」にあるように、田辺論稿は、東西のせめぎ合いのなかで美術を中心とする芸術の「普遍性」を考えるために、専門のイタリア・ルネッサンス期の画家の中から、ボッティチェリ（1445～1510）をめぐる矢代幸雄（1890～1975）とリトアニア出身のバーナード・ベレンソン（1865～

1959)の往復書簡、さらにはニューヨーク近代美術館での絵画購入時の鑑識に尽力したイギリス人ロージャー・フライ(1866~1934)の西洋的評価にも言及している。

一昨年刊行された元名古屋ボストン美術館学芸員山梨絵美子と越川倫明編訳『美術の国の自由市民—矢代幸雄とバーナード・ベレンソンの往復書簡』玉川大学、2019を丹念に検討されている。山梨氏は、矢代の美術史家としての形成に関わるであろう大正期の美術教育、とりわけ展覧会を取り上げた論稿を発表されている。また、名古屋ボストン美術館時代には、天心の展示とも関係されていた。越川氏は田辺氏が引用している『藝術のパトロン』に解説を執筆されている矢代研究者である。

上記の点も含め、矢代幸雄という美術史家、批評家の人物像が描かれていれば良いのだが、1920年代の留学時代と30年代後半から43年の『日本美術の特質』、終戦直後、1950年代後半以降の天心礼賛者ということが断片的に述べられている。少なくとも矢代本人による『私の美術遍歴』岩波書店、1972を参照されるべきであろう。先に引用した山口静一『フェノロサ』下、253頁は、矢代が1965年にワシントンで行った英語講演「日本美術の推奨者チャールズ・L. フリーア氏について」の全訳が『美術遍歴』460~84頁に引用されており、「フリーアが1895年来日し、原三溪や三井の重鎮で益田鈍翁のような東洋美術のコレクターで、大和絵系の絵画から光悦・琳派系の作品に興味を有する人々であった」と紹介している。

フリーア美術館は、横山大観が「東洋のホイットラー」と絶賛されたホイットラーの作品収集にも尽力したし、『茶の本』刊行百周年の展示も開催している。ボストン美術館のために中国古美術の購入を行っていた天心のライバルでもあった。全集解題は注目していないが、5巻266頁に「1912年5月27日に天心が購入した延清堂で」「at this shop Mr. Freer bought」と記されている。『茶の本』百周年記念の小規模な特別展の内容については、図録は入手できなかったが、鵬の会に寄せられた資料⁽⁴⁾によれば、光悦「黒楽茶碗」や光悦の書も展示されていた。

『サントロ・ボッティチェッリ』岩波書店、1977は、原書にも訳書にも献辞があり、「関東大震災で亡くなった父、そして今も待ってくれている母」に献げたもので、1924年の降誕祭の夜に書いたもので、この翌日矢代は帰国を決意する。帰国後の十数年の経緯が不明確なままで、「はじめに」で問題提起のために引いたネルソン論文が「おわりに」の最初に引かれ、田辺論文の結論1といえるのが60頁の前半部である。なぜ、ここで矢代の同門で、理解者とされるクラークの同時代人からの見解が紹介されなかったのであろうか。(クラークによる矢代追悼文は後述)。

全く素人の評であるし、仲間内であるからやや厳しい評になり、注文をつけるかもしれない。すでに引用した本書全体の「はじめに」3頁と73頁でも明らかであるが、『美術の国の自由市民』からの引用が55~60頁の3分の2であり、以下に掲載されるような先行研究にも、少しは触れて欲しかった。

本研究班の成果も献本している西洋美術史だが、「東西の融合」にも関心を抱く稲賀繁美氏の大著『絵画の臨界—近代東アジア美術史の枢樞と命運』名古屋大学出版会、2014には、インドの岡倉覚三130~240頁、註89~111頁があり、136頁には1910年ロンドンにおいてフライがインド芸術の

全面否定に抗議する文書を連盟で出したという例も示されている。他方、矢代に関しては、「矢代幸雄における西洋と東洋」458～82頁、註160～8頁）が掲載されている。

『美術の国の自由市民』の362～84頁なかでも371～7頁と、田辺論文57頁、61頁および62頁（注40）に示されているフライ像は、ボストンにおける天心覚三との交流さらに1908年のロンドンでの再会に至る時期のフライのアジア観について考察せず、いきなり晩年の講義録が述べられている。同様に、矢代が恩人の一人にあげている58頁のビニョンが天心に批判的で矢代の理解者であった、という根拠は不明である。詩人としてのビニョンは、野口米次郎を評価していたらしい。ベレンソンについても、ガードナー夫人との書簡（そのうち覚三に言及した書簡が一通存在）が検討されていない。「フライの東洋観については更なる解明が必要」（56頁）としているから、これらを併せて今後の研究に期待したい。

田辺氏は矢代の著作としては、2019年に文庫・新書で出た本を除いては拙稿18頁での『日本美術の再検討』新潮社、昭和53（1973）年を孫引している。けれども、同書の序—美術史と美術（7～22頁とくに「岡倉天心の東洋美術」19～22頁）が田辺58～9頁と重なってくる。また、石澤正男（大和文華館初代館長矢代の後継者）のあとがき（319～26頁）は、ケネス・クラークの追悼文（“Yukio Yashiro” *Times literary Supplement*, Aug. 21, 1975の抄訳を含めたベレンソン門下のことや『日本美術の特質』（田辺60頁では同書が高評価されたと記されている）が簡略に考察されている。1943年に上梓されたこの本の背景をたどれば、天心の日本美術論、世界美術論の源に到れるのではとの仮説に立った研究にも期待したい。

細かい点であるが、58頁の「タゴールの通訳」は、『日本美術の恩人たち』文藝春秋社、1961の43～4頁を引く方が良い。「東大を出て東京美術学校の講師となったばかりの（大正5＝1916年）夏から秋にかけて」という矢代の履歴と『東洋の理想』のインドでの受け取られ方も記されている。さらに、東京芸大の英語、西洋美術史担当に採用されたことが記されている。

タゴールと観山が交わした『弱法師』を目の前にしての会話の通訳（『前掲書』56～8頁）は、矢代にとってとても勉強になった。1916年にタゴールの通訳で滞在した三溪園との縁が東洋美術とりわけ、日本美術に対する矢代の関心を増幅し、59頁にある「1958年5月16日の岡倉天心生誕記念碑除幕式に矢代も出席をして挨拶をしたらしい」に繋がる。六曲一双屏風『弱法師』に描かれている日輪の構図が「矢代の欧州体験記の『太陽を慕ふる者』という題に影を落としているといってもあながち的外れでないであろう」という稲賀の推測は深読みに思える。（稲賀繁美『前掲書』、212～4頁）。筆者には「晩秋のロンドンの街頭でオーソレミーヨを聞いてイタリアに旅立った」という単純な背景に心惹かれる。

木下長宏が『岡倉天心』執筆で参照した岡倉天心先生生誕碑建設委員会編刊の「記録」には参列者について富田幸次郎〔ボストン美術館東洋部長〕と斎藤隆三〔再興日本美術院代表〕というように肩書が記されている。矢代幸雄は〔帝国美術院美術研究所（のちの東京国立文化財研究所）初代所長、文化財保護委員などを歴任、日本美術行政において重要な役を演じた〕とある。56頁にある美術研究所は、イタッティ研究所やロンドン大学コートールド美術研究所のウィット卿の写真収集

による研究方法に基づくものであり、1930(昭和5)年に東京で開所される美術研究所の日本美術研究に新たな地平が生まれる。

細部拡大写真を使用する「ヤシロ・メソッド」によって画家名不明とされた《聖ヨハネとマグダラのマリアのいる聖三位一体》がボッティチェッリの親筆と決めた過程を執筆した論文が東洋人で唯一のベレンソンの弟子に命名されたというエピソードは記述して欲しかった。写真といえば、「記録」に掲載されている除幕式写真には一人の少年が写っている。それは天心のひ孫の登志である。私の記憶では、除幕式では内山岩男神奈川県知事、二年後に外務大臣として日米安保条約に調印した藤山愛一郎らが挨拶され、会場を三溪園に移し、矢代が基調報告的話をした。記憶にあるのは小柄な老人の話であった。彼こそは、天心によって17歳でロンドンで見出されボストン美術館に移り、太平洋戦争中もアメリカ国籍なしでボストン美術館の東洋部(とくに日本美術)を死守した恩人富田幸次郎であった。

本題に戻そう。ベレンソンと同様に、フライの東洋(アジア)美術観を知るには、ガードナー夫人のフェンウェイ・コートサロン(1901~23)の様子を紐解く必要がある。筆者も手着かずのままである。ただ、イタリア・ルネッサンス絵画のコレクターであったガードナー夫人については、55頁で引用されているものでなく、ガードナー夫人の死後一年後に上梓された最初の伝記に継ぐガードナー美術館公式の伝記(美術館で販売)で1965年に刊行され、ニューヨーク・タイムズ書評で絶賛されたHall Tharp ホール・ザープ? ガードナー伝 *Mr. Jack* は、本文345頁のうち、37頁以上がベレンソンにあて、ボッティチェッリ作品をガードナー夫人が購入するときのアドバイスにも言及されている。

1923年からまる三十年間に交わされた114通に及ぶ往復書簡(57頁)の何通が天心関連のものなのか明示されていないが、この田辺論文を読んだ限りでは、論文の隠れたメイン・テーマである『サントロ・ボッティチェッリ』序(1925)を論議している「往復書簡14」1927年10月4日と「同16」1928年4月18日(57~8頁)ならびに矢代がボストンにおける天心の功績について直接言及している「往復書簡39」1948年12月2日が書簡の書かれた順になるが、田辺論文執筆の動機では、後者が先である。さらに「往復書簡51」1952年1月=57頁の引用文(注13)は第二次世界大戦(太平洋戦争)敗戦後の日米文化交流の推進者となった矢代の立場が垣間見られる。

ここで方法論的にも問題になるのは、比較の基準、とりわけ時に関連する事柄である。天心の1890年頃におけるボッティチェッリ作品の理解とイタリアとりわけフィレンツェで研究した矢代を比較するのはどこまで有効であろうか。比較するならば、日本におけるイタリア美術研究のパイオニアである岩村透(1870~1917)ではなからうか。恐らく、矢代に少なからぬ影響を与えているはずだ。けれども、教育や制作にあたって、写真や幻灯(スライド)をできるだけ参考にするというのは、欧米で教材を買い集めた天心にまで遡れよう。

反復するが、矢代についての情報が断片的と思われる。「1921年3月より欧州留学をはじめた」「同年秋にはロンドンからフィレンツェへ移住してベレンソンの門下をたたく」(57頁)。55-60頁を参考にすれば、1925年に師ベレンソンへの「回答」として大著『サントロ・ボッティチェッリ』刊

行は、ホーンをはじめとする 1920-30 年の欧米美術家の女性的な東洋と男性的な西洋」という対比に抵抗するために矢代はボッティチェッリの様式、アジア的感性という従来の観念を払拭する必要がある。さらに、ウォーナーを介しての天心との関わり（1910、1923、1946 など）が記されている。

田辺論文の中核部分は 59 頁（注 23）と同じく、『美術の国の自由市民』374～5 頁の引用である。日本の美術史家や評論家がイタリア・ルネッサンスとりわけ、ボッティチェッリをどう見ていたかについては、二回の欧州旅行記と講義録とか数少ない資料から肝心の天心の見方に触れてよからう。管見でも、男性的な表現のある作品の感想があった。1890 年前後の泰西美術史には、衣服の描き方への評価が見られる。

前後するが、55 頁「ロジャー・フライと天心」冒頭におけるガードナーのサロンの人物で天心と比較しているチャールズ・エリオット・ノートンとシンガー・サージャ（エ）ント（少なくとも前者）には注釈が必要であろう。前述の *Mrs. Jack* の帯には、ガードナーを取り囲む若者たちにパトロンの対語として用いられている protégé（取り巻き）として、8 人があがっている。チャールズ・エリオット・ノートンについては、ダンテ『神曲』の研究者で、天心と交流時にハーヴァード大学学長であったチャールズ・エリオットの従兄弟であること（拙著は誤記）、とりわけ重要なのはハーヴァードでベレンソンを教えたことと、ガードナー夫人に 1887 年頃に紹介されたことである。

55～6 頁 4 行目にかけての引用は、ガードナー夫人とガードナー夫人の夫の従兄弟カーティス（1878～1915）を誤って引用している。カーティスは『天心をめぐる人々』拙稿 5 頁に 1908 年秋に来日時の写真が掲載されている。また、『岡倉天心全集』第六巻、1980 年の書簡 415 を収録したうち 1909 年 7 月のカーティス宛て（385、386）と 12 月中川忠順宛て（414）は、拙稿 18 頁の註（5）に追加したい。

それよりも、1920 年代の『東洋の理想』の読み方というか、大正期における風潮が矢代に「天心が汎アジア主義者であり、日本の多くの若い学者たちは、何ら意図せずに岡倉氏と同じ考えに従っている」と言わせたのであろうか。

1958 年に発表された文章（『日本美術の再検討』19～20 頁に再録）も、1925 年頃の青年矢代の断定と変化していないようにみえるが、矢代の「アジアはひとつ」は、浅野晃や「歴史文化研究会」などに代表された戦中期の岡倉解釈—「アジアは一つという預言者的情熱詩人天心の言葉は大東亜戦争によって実現しつつある」と異なり、矢代は、『レオナルド』研究者で親友ともいえる児島喜久雄（1887～1950 1910 年の東京帝国大における天心の「泰東巧藝史」講義を記録している—『岡倉天心 日本美術史』平凡社）や漱石の弟子で『三太郎の日記』の阿部次郎（1883～1959）とともに、「国際派」として体制派から睨まれていたはずである。

矢代が英文『ボッティチェッリ』を発表したのと同じ頃、フィレンツェ滞在記の下宿の娘に憧れたエッセイを『改造』に発表した『太陽を慕ふ者』は前述した。田辺徹氏は、東京美術学校における西洋美術史講座で矢代の前任者岩村透（田辺教授の祖父考次氏の恩師）の『美術新報』に掲載されたアッシジ紀行文と『太陽を慕ふ者』を比較して「このようなセンチメンタリズムは、岩村の

次の世代に当たる大正期の教養主義の負の一面にはかならない」とされているのは興味深い。⁽⁵⁾

矢代は、留学希望を持っていた岩村の休職・退職によって日本人として天心がはじめて担当した「泰西（西洋）美術史」の四代目〔天心（1891～3 頃）—鷗外（1896～9）—岩村（1901～1916 だが休職期間が長い—矢代（1916 就任））となったが、日本人で最初の本格的西洋美術史を講義したのは岩村であった。岩村は「岡倉校長は天才的な大美術家を教育する一種の家塾のような教育場の経営という理想と伝統的な国粹美術に対する熱烈な精神をもっていた」「正木校長時代になると美校の理想は次第に薄れていった」と『美術週報』に記している。⁽⁶⁾

田辺論文 57～8 頁に科学的鑑定法に関連させて、未熟な天心の講義メモが引かれているが、57 頁の『泰東工藝史』引用は文学的の後にある〔○文学上の微證の価値〕を除いているが、文学を低く見る例もあるが、ここでは繊細に細部を観察していることを褒めているのであろう。先の「記録」もそうであるが、引用削除の基準が分からない。もっとも、「天心の著書などにベレンソンの名前は言及されているのだろうか」という問への回答だから根本的には引用には問題ない。

矢代の美術研究方法と東西美術観の変遷にとって、本人の個人及び社会的環境などにも目が向けられなければならないと思うが、話題が多岐に及び、論文の焦点ボケを嫌ったためであろうか言及がない。少なくとも天心以降の日本におけるモレルリ研究では、1919 年に慶応大学の沢木四方吉（1886～1930）が『三田文学』に発表した論文が知られているが、岩村は 1904 年にそこでは欠落している美術行政家としてのモレルリについて言及した。⁽⁷⁾

5) おわりに（60～1 頁）では、問題設定の「普遍性」の理解者クラークとフライを検討している。61 頁では、フライの『講義録集』を編纂した年にクラーク（1903～83）が名著『レオナルド・ダ・ヴィンチ』を上梓し、すでに《大洪水》素描の東洋的性格にふれ、矢代との出会いから間もなくして東西比較を追求したことがわかる。その背景と矢代『水墨画』を引きながら、結論に至るのだが、58 頁の内容が反復されているだけの前半部分「ベレンソン、フライ、クラークらに自然と伝わり、継承される比較美術の方法論が矢代にも自然に伝わり、「一つのアジア」を提唱しつづけた天心への反発」は、1903 年『東洋の思想』時の天心が晩年にはどのような主張をしていたか、逆に 1890 年代の「泰西美術史」で、「東洋と西洋が互いに加味して普遍美術を形成して始めて世界美術と称すべし」と講義を結んだことをどのように考えればよいかという問いが生じないであろうか。

『水墨画』については、1886 年の夏のコレラ禍に來日したジョン・ラファージ（1835～1910 美術評論家でステンドグラス作家フランスではラファージュ）がフェノロサに案内されて京都で見た牧谿（南宋末、元初期画家）でラファエルを感じたのと 1887 年 1 月に天心がニューヨークでレンブラントのエッチングで濃淡を研究した折の比較方法や感嘆との差異を示唆してもらいたい。⁽⁸⁾

4. 宮瀧交二「明治 15（1882）年の E.S. モースと W.S. ビゲロウの埼玉・胃山の根岸家訪問」（65～73 頁）であるが、タイトル通りの内容である。

本稿ではボストン・ブラーミン⁽⁹⁾として知られるボストン周辺の東洋（日本）研究者 4 名を取り上げることにする。すなわち、拙稿と田辺清論文で言及されている L. ウォーナー⁽¹⁰⁾、宮瀧交二の

対象である E.S. モース⁽¹¹⁾、W.S. ビゲロウ⁽¹²⁾、P. ローウェル⁽¹³⁾ を取り上げる。けれども、紙幅からモース、ウォーナー以外はほとんど言及できないであろう。

モースと岡倉覚三の関係—東大時代から 1883 年 2 月の帰国まで

宮瀧論文は、東松山キャンパスのエリアといえる埼玉西部における考古学的発掘調査とモースの関係の事例研究としては興味深い^が、天心との関係というか問題意識が不鮮明に思うので、「天心と考古学」の具体例もいくつか挙げてみたい。「はじめに」を読むと「[[岡倉天心をめぐる人々・3]]」として、「岡倉覚三（天心）と E.S. モース」を主要テーマとされていたようで、執筆時点の筆者のアドバイスに従って、フェノロサ研究の第一人者でビゲロウやモースにも詳しい山口静一先生にヒアリングされたと聞いている。66 頁には次のような文章が見られる。

「B.H. チェンバレン⁽¹⁴⁾、岡倉天心、J.H. ウィグモア⁽¹⁵⁾、W.S. ビゲロウの 4 人が P. ローエル邸に集まって集合写真を撮影していることは非常に示唆的である。P. ローエル、ビゲロウが、それぞれ E.S. モースとの親交を背景として来日していることは広く知られているところであり、天心と E.S. モースが彼らを介して何らかの接点を有していたであろうことは、想像に難くないところである」。⁽¹⁶⁾

ここからは、天心とモースの接触のプロセスが明らかにされるのであろうと期待される。前半部分「ビゲロウとローウェルがモースとの親交を背景として来日していることが広く知られている」とあるが、具体例の説明が一般読者には必要であり、モースに関する代表的な先行研究や、直にこのテーマを扱った論稿⁽¹⁷⁾、さらに、フェノロサの存在に言及して欲しかった。

さらに、あまり知られていないフェノロサとモースの出会いの仲立がセーラムの名士ピーボディー（George Peabody, 1795-1869）であり、彼の援助のおかげでスペイン人の音楽家であったフェノロサの父親がセーラムに永住でき、地元の旧家の娘と結婚できてアーネストが誕生したのである。⁽¹⁸⁾

モースと天心（覚三）の関係

両名の関係は、モースの東大教授時代と天心が 1904 年から 1913 年まで毎年ほぼ半年間アメリカ滞在期における交流が実証されなければならない。後者は L. ウォーナーを含めたまさに東洋文明史、考古学に関わる事例研究になると思う。

『モースの見た日本』⁽¹⁹⁾ の二名の構成者（事実上の監修者？）で序とあとがきを執筆している田辺悟はモース・コレクションの文化史的意義やモースの業績について次のように述べている。「守屋毅氏は日米文化交流の文脈のなかで検討され、また、評価されるべきではないか。在日中のモースの周辺には、モースをめぐるさまざまな人脈が形成されていた。その人脈のいくつかはモースのもたらしたアメリカの知識を受けとめる基盤であった。またいくつかのグループは、モースに日本を知らしめる環境にほかならなかった。」⁽²⁰⁾

この最後の三行に関連しては、岡倉古志郎も指摘しており、日本からの発信者としての面のみが

注目され、日本側の西洋文明・文化の需要、言い換えれば、欧米における形成期の人類学や考古学は、日本の「民俗学」や考古学・古代史の「近代化＝科学性」の進展と結びつくであろうし、宮瀧氏の問題意識もここにあったであろう。B.H. チェンバレンは「イギリス人類学の父」タイラーとも交流があり、國學院大学研究推進部の紀要には二人の往復書簡の研究も掲載されている。

モースとビゲロウ、ウェルドらの出会いについて、別の具体例を示してみたい。モースが1880年に館長に就任したセイラム・ピーボディー博物館のジョン・セイヤー日本文化研究員は次のように記している。

「モースは館長の地位にあった折に二人のボストン人に出会います。彼らはモースの日本に対する情熱に大きく影響されました。ゴダード・ウェルド（1857～1911）博士とウィリアム・スタージス・ビゲロウ博士です。二人はモースを「センセイ」と日本語で呼びました。モースは1883年を最後に四度日本には戻りませんでした、二人はモースの仕事を引き継ぎ、コレクションを増やしました」。⁽²¹⁾

ビゲロウは、ボストン美術館理事であり、1876年のフィラデルフィア万博で日本館を夢中になって見学しており、来日を念頭に置いて1881年から準備を進め、モースセンセイとも接した。

ウェルドは1885年に来日し、日本の民具をはじめ、物品のコレクションに尽力した。ハーヴァード大医学部でビゲロウの後輩であったウェルドは並外れた富裕層に属し、来日時にスクナー（日本マストの帆船）で横浜長崎間を回遊していたが、彼が日本の「宝の山」に魅了されたのは、モースがボストンで何度も行った熱あふれた講演に魅了されたからに他ならない。

P. ローウェルがセイラム・ピーボディー博物館をはじめ、ローウェル・インスティテュートやビゲロウの別荘などでモースの講演に魅了されたことは間違いない。彼と一緒に1883年6月に横浜に到着したのがガードナー夫妻であり、駿河台に住んでいたビゲロウがほぼ連日案内をしている。⁽²²⁾

『その日その日』にある1881年から翌年にかけてのローウェル・インスティテュートにおける12回の連続講演は、ピーボディー博物館でのものよりも大きな影響力を持ったであろう。この連続講座中に、ビゲロウは別荘にモースを招待しているし、ガードナー夫妻もモースにレクチャーを依頼していた。

1950年代後半以降のロックフェラー（三世）財団やカーネギー財団が果たしたのと類似の日米文化交流の役割を19世紀後半から第一次世界大戦とまでボストンにおける文化活動の拠点の一つがローウェル・インスティテュートであった。筆者には1904年から13年までのボストンにおける天心の考古学、古代史研究にとってもここが重要な拠点であった、との推論に沿っての考察がまだ残されている。

宮瀧教授は、モースと天心の1882（明治15）年6月時点での接点の証拠として考えていた写真にモースが写っていないし、1889年に撮影されたものということで、出鼻をくじかれてか、1882年以前のモースと天心の交流の可能性について、仮説も立てていない。モースの初来日は1877年6月で、その三ヶ月後には大森貝塚の発掘を実施している。このとき天心は東京大学政治学・理財科に転入したばかりであったが、元々歴史に関心があり、好奇心旺盛な天心が大森貝塚発掘に関心を示

さなかつたであろうか。

いずれにせよ、モースの初来日時は1877年6月～11月で、帰国後12月下旬にボストン博物学会で「日本のシャミセンガイと貝塚」の演目で講演している。二回目来日の1878年4月から翌79年9月に天心は東大在学中であり、しかも、モースによって東大の職を得たフェノロサの通訳、日本文化の翻訳・紹介役が天心や有賀長雄であった。

寛三は理財・政治学科で神田一橋校舎であったが、本郷は徒歩でも小一時間だし、聴講した可能性は否定できない。手伝いでもしばしばフェノロサ邸に呼ばれていた。

加賀屋敷は赤門しか残っていないが、フェノロサは加賀屋敷の一番館、モースは五番館⁽²³⁾に住んでいた。(モースのスケッチや写真も残されている)。

1882年6月のモースとビゲロウの行動を調べてみると、6月4日に来日した両名はすぐには京都・瀬戸内海への旅には出発してはいない。⁽²⁴⁾ 当時の東京大学では、6月は後期授業中であり、7月10日が卒業式であった。モースは加賀邸に行き、ビゲロウに日本の若い友人を紹介した。モースとビゲロウのための歓迎会も催され、「博士」が食後の最初のスピーチをした。モースも記載している歓迎会は、6月22日にフェノロサが主催者となり、築地精養軒で催された会のことであろう。東大関係、ハーヴァード関係ら多数列席したのは、モースへの敬愛ぶりを示すものであった(福澤諭吉や津田仙も列席)。食後の返礼スピーチの口火はビゲロウが切ったが、モースのスピーチには金子堅太郎が質問したらしい。⁽²⁵⁾

この歓迎会に文部省に二年務めたばかりで多忙であったにせよ、天心はフェノロサの一番弟子であり、役職からも世話役(幹事)として手伝わぬ方が不思議だし、文部省の事実上のNo.1で、後見人ともいえる浜尾新も列席していた。出張もしていないし、三日後には辞令を受け取るために文部省に出所した記録が残っている。

歓迎会から一ヶ月後、モースは待ちに待った京都、奈良方面への旅に出たが、モースの旅の第一の目的が陶器の蒐集であったことは日誌にも記されている。⁽²⁶⁾ 本学の『東洋研究』に寄稿したことのあるアメリカの建築史家ケヴィン・ニュートは、「(モースは)有殻軟体動物に関する専門から離れ、極東の陶磁器の権威となり、ついにはボストン美術館の陶器管理者にまでなった。モースは神社仏閣ではなく、日本の普通の家に注目し『日本住宅と環境』を刊行した」と記している。⁽²⁷⁾

陶器ではもちろんのこと、建築でも天心が相談に乗っていたであろう。

この旅でのモースと天心の関係のエピソードが代表的『モース伝』の著者ウェイマンによって伝えられているが、⁽²⁸⁾ 註に示したように二つの誤りがある。

ある夜、モースは急に黙りこんでこんでしまった。今までにないことだったので二人はどこか具合でも悪いのかと尋ねた。「我々が買っているような日本の立派な美術品が市場に出回っていくのは、まるで隠れた傷口から日本人の生血が流れ出るようなものだ。日本人は自分たちの美しい宝物が海外に流出することがいかに悲しいことかわかっていない」とモースは答えた。この言葉は後ろに控えていた日本人通訳(岡倉)の心にグサリと刺さった。この瞬間、岡倉はこれこそ自分の使命だと思って、東京に帰ると政府や民間の有力者に粘り強く美術品の保存を説いて回った、モースの

言葉によって蒔かれた種は、やがて花開いた。その結果、1884年に国宝を保存する法律が制定された。

モース帰国後の関係

モースは、1883年2月14日に中国・欧州経由で帰国の途についた。その後日本に来ることはなかったから、天心が第一回欧州調査の往復でアメリカにいた1886年晩秋からクリスマス期と87年7月、ボストン美術館勤務となった1904年から1913年2月での接触をローウェル研究所やセイラム・ピーボディー博物館の記録などからアプローチできよう。ちなみに、1909年11月などには、天心の弟由三郎が公演を行っている。

P. ローウェルについては取り上げる紙幅がなくなってしまったが、ネットにもかなりの情報が見られる。日本人論や能登の旅など邦訳もある。火星の運河発見者とされ、穴水周辺でUFOが話題になるのはP. ローウェルと無関係ではなかろう。初来日に関しては、註(22)を参照されたい。

宮瀧論文に関する結びに代えて

『天心をめぐる人々』のまえがきに相当する「はじめに」4頁を、田辺清教授は、「宮瀧の次のテーマとされる“岡倉天心と考古学”の成就が今から楽しみである」と結んでいるが、筆者が口頭で宮瀧教授に伝えたように、1904年から13年までのボストンにおける天心とモース、さらにウォーナーらとの中国、中央アジアなどの古代史や考古学的研究を紐解くことは並大抵ではないが、やりがいのある仕事である。この時代の中国、インドなどの資料は国内でも、東洋文庫、国立国会図書館などでも調べられるであろう。

ところで、宮瀧論文の出だしにある写真(65~6, 71頁)の誤りを広めた堀岡の小著は19世紀末から20世紀の四大文明における考古学の発展に天心が関心をもった背景がすぐに判明する。堀岡の英文による岡倉覚三伝 *The Life of Kakuzo* (北星堂書店、1963)の93~7頁にある年表からである。もちろん、覚三(天心)の生誕から没年までが中心であるが、10の個人に関係しないカッコ入り項目がある。その半分は、1858英国がインド統合、1860日米修好条約批准、1863リンカーン奴隷解放宣言、1867明治王政復古、1904~5日露戦争であるが、残り5項目は発掘関係である。

1893-7 Sven Hedin (1865-1952) の内奥アジア探検

1899 大谷光瑞 (1876-1946) 中央アジア探検

1900 A.Stein (1862-1943) の古代ホータン Khotan 探検

1904-7 A.Le Coq の中央アジア探検

1907 Stein のセリンディア探検

岡倉覚三の日記・メモ類にも彼らの名前が登場しているし、中国や中央アジア探検関連では、ウォーナー書簡や、早崎稔吉関連の文書からも辿れる部分がある。一例としては1908年の欧州旅行日誌にヘディンとシャヴァンヌの中央アジア関係の仏語著書が参考文献に掲載されている。(岡倉天心全集、5巻403頁も参照)。

また、第二回の欧州旅行日誌（明治41年）には、44年の英仏日誌が混在している。

1月24日には大英博物館ビニョンを訪ね、スタイン・コレクション、地下ではアンドリュウ助手の案内で第二回の発見を。1月27日、2月2日、ペリオ踏査隊敦煌千仏洞など（同上、5巻によるが、明らかな誤植は訂正）。

その他、宮瀧氏の専門に近い東アジアでは、朝鮮総督府時代の1909年に東大の関野貞（1867-1935）の朝鮮（主に楽浪）古跡調査には関心があったはずである。関野の奈良での古社寺調査体験は、天心に導かれたものであった。また、ボストンに随行した漆工芸の六角紫水は、1917年に関野らの調査への参加を求められ、楽浪漆器の蒐集・分類を昭和18年まで行った。⁽²⁹⁾

さらに、「西洋美術史ノート」（『岡倉天心全集』8巻解題で「日本人種の流れについてのメモ」とされている170~180頁には英文で考古学関係の文章が記載されている。170頁にMuseum 考古学、溝口（禎二郎）とあるが、183頁Museum rise of the museum art history archeologyとあり、自らが講義を担当するためのメモと推察される。その内容には千葉貝塚とかshell-moundの語も頻発されていて、筆者にはむしろ、「日本のアボリジニーは誰か」との間を発し、アイヌやアマ（南方民族）に言及している部分が目を引いた。

2020年9月1日脱稿

(1) 同教授は、日印関係でヒンズーと仏教、タゴールと天心関係に調査と文献研究で精力的に取り組んでいる。1902年の天心によるブッダガヤにおける活動の参考文献には「ダルマパーラのブッダガヤ復興運動と日本人」（『日本研究』53、189-226、2016）、「アナガーリア・ダルマパーラのブッダガヤ復興運動とインド—宗教的普遍主義からシンハラ仏教ナショリズムへの軌跡—」（『国立民族学博物館研究報告』43巻2号、121-157、2018）がある。最新の論文に「岡倉天心とヴィヴェーカーナンダの反響するアジア美術史観：インド美術史論争におけるギリシア起源説と社会進化論の克服を通して」『日本研究』60、2020、3、39-94頁がある。

(2) 自然発達論者が覚三の基本的立場であると筆者も理解していた。岡本佳子の研究によれば、この鑑画会での講演のみであった。

これに関連して、フェノロサの死後に上梓された *Epochs of Chinese and Japanese* 『東洋美術史綱』は（フランス語版はルーヴル美術館のミジョンが序文）原点に戻って検討も必要であろう。フェノロサの遺稿をメアリー夫人が編纂した同書について、オランダの著名な作家で1922年から23年に8ヶ月日本を旅行したルイ・クペールスの *Nippon* が近年邦訳され、フェノロサとこの著書の詳細な紹介と評価が記されている。（クペールス、国森由美子訳『オランダの文豪が見た大正の日本』作品社、2019、196~9頁）。

(3) 有賀長雄（1862~1921）は覚三より二学年下であったが、一緒にフェノロサの助手役を果たした。有賀はフランス語にも通じ、フランス植民地政策や国際法の研究をした。また、伊藤博文の秘書官をし、1887年にウィーンで佐賀藩出身の官僚佐野常民（1822~1902）の赤十字事業を助

- け、1908 年頃にノーベル平和賞にノミネートされたという。
- (4) 村形明子「フリーア美術館における *The Book of Tea* 出版百年記念展 (2005 年 11 月 -2006 年 6 月)『鵬』3 号、2006、12、(11~17 頁)。
 - (5) 田辺徹『美術批評の先駆者、岩村透 ラスキンからモリスまで』藤原書店、2008、72 頁。
 - (6) 『前掲書』367 頁。
 - (7) 『前掲書』138~43 頁。とくに 138 頁にはモレルリと岩村の美術史研究の方法論が示唆されている。
 - (8) とりあえず、岡倉登志『曾祖父覚三 岡倉天心の実像』宮帯出版社、2013、65~66 頁。拙稿「岡倉覚三(天心)と西洋美術(その1)」『東洋研究』194 号、平成 26 年 12 月 25 日、(2)~(3) 頁。
 - (9) 「岡倉覚三が敬愛したニュー・イングランドの女性たち」『大東文化大学紀要』〈人文科学〉2018 で主に取り上げたガードナー家も代表的なボストン・ブラーミンである。その概念は聞き書き調査と文献資料を駆使した渡辺靖『アフター・アメリカボストニアン軌跡 [文化の政治学]』慶應義塾大学出版会、2004 参照。渡辺はボストニアンを①アングロ・サクソン系プロテスタントの上流/中上流階層に属するボストン・ブラーミンと②アイルランド系カトリックの下流/中下流階層に属す家族ボストン・アイリッシュと二分している。ブラーミンはヒンズー教のバラモンに由来している。管見では 1936 年の『ニューイングランド:インディアン夏の夏』以降にボストン・ブラーミンは普及し始めている。アメリカ全体では WASP、ニュー・イングランドではヤンキーがより一般的。
 - (10) 筆者はラングドン・ウォーナー (1881~1955) について、「岡倉天心とボストン・ブラーミンズ (2) ラングドン・ウォーナー」『東洋研究』第 152 号、大東文化大学東洋研究所や『曾祖父覚三 岡倉天心の実像』、152~162 頁などで取り上げてきたが、父方が 1637 年に移民してきた白人プロテスタントの子孫であるのみならず、母方のジョン・ウォーナーはアメリカ独立宣言にハミルトン (大ボストン) の代表として署名した人物であった。
 - (11) E.S. モース (1838~1925) の邦訳もある資料的文献については後述される。もともとは生物学者・動物学者であるが、日本に関しては、考古学者、民俗学者、建築学者、陶器蒐集家の顔が知られている。
 - (12) ビゲロウの伝記略伝としては、村形明子「ビゲロー略伝」1971、『古美術』35、三彩社はジョージ・ワシントン大学に提出した学位論文 1971 の「自伝的イントロ」pp.1-25 の抄訳ともいえるものだが希少。仏教徒、修行者としてのビゲロウについては、山口静一『三井寺に眠るフェノロサとビゲロウの物語』宮帯出版社、2012 が詳細。ビゲロウと天心の 30 年余の交友は十分に一冊の著作にすることが可能である。宮瀧 70 (5) にある伊藤泰夫の著作では「ボストン・ブラーミン ビゲロー家の 3 博士」『日本病院会雑誌』Vol.63 No.6・7・8 2016 が重要。ビゲロウの母方の父が桁外れた富豪で、この祖父の名がつけられた。
 - (13) ニュー・イングランドの名門中の名門 Lowell 家について 20 世紀初頭には、「ローウェル家は

キャボット家とのみ話をし、キャボット家は神とのみ話す」という表現がハーヴァード大学でも知られていた。(渡辺靖『前掲書』29頁)。三省堂の『コンサイス外国人名辞典』には天文学者のパシーヴェル・ローウェル(1855~1916)を含めて四名掲載、最初にあるフランシス・キャボット・ローウェル(1775~1817)はマサチューセッツでアメリカ最初の綿業工場を設立した。ジェームズ・ラッセル・ローウェル(1819~91)は詩人・評論家、ハーヴァード大教授でもあり、ガードナー夫人とも交流があった。なお、同辞典初版(1985)にはモースの没年が1923年となっているが、これは遺言を記した年。『講談社カラー版 日本語大辞典』はローエルの表記で、女流詩人エミー・ローウェルが選択されている。

- (14) バシル・ホール・チェンバレン(1850~1935)古事記をはじめ日本の古典の研究、翻訳で知られる。フェノロサと親しかったラフカディオ・ハーン(小泉八雲 1850~1904)とも親しかったから、覚三は本郷のお雇い教員宿舎その他でチェンバレンと交友が始まったと思われる。同じような推論はモースと覚三にとっても成り立たないであろうか。
- (15) H. ウィグモア(1863~1943)は、アメリカの法学者で著名なフランス人ボアソナード(1825~1910)とともに明治日本の法律教育や体系化に貢献した。『法学研究』にはウィグモアとボアソナードの交換書簡の研究が掲載されている。覚三は法律への関心も強く、1887年にはウィーンで明治憲法制定に関与したロレンツ・シュタイン(1815-90)と三回会い、食事をした。
- (16) 宮瀧交二「明治15(1882)年のE.S.モースとW.S.ビゲロウの埼玉・青山の根岸家訪問」『天心をめぐる人々』2020、66頁。1882年6月4日の来日で磯野直英『モースその日その日 ある御雇い教師と近代日本』有隣堂、1987を参考されているが、蛇足かもしれないが“Japan day by day” by E.S.Morseを丹念に紐解くことが不可欠な作業であろう。
- (17) 井戸桂子「ボストンからの来訪者の波—1880年代の日本旅行ブームの背景」(『日本文化研究』第一号、駒沢女子大学日本文化研究所、1999年、161~3頁)。1876年のアメリカ建国百周年のフィラデルフィア万博でのモースやビゲロウの日本館への関心については、岡倉古志郎「フェノロサ=天心関係に見られる東西文化の相互研究」『東洋研究』第124号(『祖父岡倉天心』中央公論美術社、平成11年に収録)および、岡倉登志『世界史の中の日本 岡倉天心とその時代』明石書店、2006参照。
- (18) 山口静一『フェノロサ』上、24頁。フェノロサはボストン・オリエンタリストではあるが、ボストン・ブラーミンではない。
- (19) 『モース日誌(その日その日)』以外では、守屋毅編『共同研究モースと日本』小学館、1988が学術的著書なので、『百年前の日本 モースコレクション写真編』1983、『モースの見た日本 モース・コレクション民具編』、1988いずれも小学館を薦める。『モースの見た日本 民具編』にはモースが根岸家を訪問した前後に描かれた武蔵地方で使用されていた犁のスケッチが189頁に、天心関係では法要の灯笼73頁と鯉節91頁がある。
- (20) セイラム・ピーボディー博物館蔵、構成 小西四郎・田辺悟『モースの見た日本 モースコレクション [民具編]』小学館、2005、16頁。

- (21) 『前掲書』212(英文)、213頁。
- (22) ジョン・L. ガードナーの日本旅行日記(A4版13枚 *Jhong Gardner and Asia*, Isabella Stewart Gardner Museum, 2009 掲載の原稿はガードナー美術館所蔵。6月18日横浜から9月4日の長崎までの旅)の記載で、少なくとも8月10日の神戸までビゲロウが同行し、親身に世話をしていたことがわかる。P. ローウェルがガードナー夫妻と7月には何度か食事をしていることもわかる。(清水恵美子『岡倉天心の比較文化史的研究』思文閣出版、2012「資料」は貴重で便利。本郷座は現在の本郷三丁目の春木町にあった小さな小屋でフェノロサ邸にも近かった。筆者がかつて居住した家の斜め前にあった。8月の京都のホテルでの丸山は円山の方が良いであろう。ただし、前述の *Mrs. Jack*, pp.86~9にあるようなビゲロウの性格やユーモラスな表現は「資料」にはほとんどみられない。
- (23) 『モースの見た日本』15頁に写真。
- (24) 『前掲書』207頁の地図は北海道(小樽)から鹿児島までのモースの四度の旅の行程がひと目で見られて便利だが、四回目の旅行を開始したのは1882年6月5日ではない。
- (25) Edward S. Morse. *Japan Day by Day*, New York, 1917, II, p.208, 216、山口静一『フェノロサ』上、194頁。
- (26) 山口静一『フェノロサ』上、194~5頁より引用。(Japan day by day)
- (27) ケヴィン・ニュート著、大木順子訳『フランク・ロイド・ライトと日本文化』鹿島出版会、1997、24頁、211頁。
- (28) 山口静一『前掲書』196頁、要約引用, Dorothy G. Wayman, *E.S. Morse: A Biography*, 1942, pp. 282~3. ウェイマンは女流画家跡見玉枝の半世紀以上のちの思い出(しかもまた聞き)を記載したもので、この時の通訳は有賀であった。また、古社寺保存法の制定も1897年であるが、モースの人柄も想像させる挿話として紹介した。
- (29) 村野夏生『漆の精 六角紫水伝』構想社、1994、192頁。

参考：ラファージと天心

ラファージ（1835～1910）は19世紀後半から20世紀初頭にかけてアメリカで活躍した画家であり、ティファニー商会の御曹司ルイスとともに日本の工芸をステンド・グラスに摂取した人物。

彼の両親は最初カリブ海に渡ったフランス人のエリート出身であり、彼はニューヨークのフランス系移民社会でカトリック教育を受けて育った。カレッジ卒業後1856年から翌年にかけて、母方の親戚を頼ってフランスに留学していた。マネの師であるトマ・クチュール（1815～1897）を自らの師として選んでいるが、しだいにウィリアム・モレス・ハント（1839～1880）に魅かれていった。

パリでは北斎漫画の存在を知るとともに、浮世絵と出会い、帰国後に浮世絵蒐集が本格化する。ラファージは1864年に結婚するが、伴侶となったマーガレット・ペリー（1839～1880）の大叔父は1853年に日本に來航したペリー総督（1794～1858）である。これがラファージを日本にいつそう惹きつける要因にもなったとみるのは自然であろう。ラファージがペリーの『日本遠征記』を読んでいた可能性は大いにあると考えられる。

ところで、覚三とラファージの出会いは、ビゲロウ（1850～1926）とフェノロサ（1853～1908）を介して覚三が『欧州日誌』をしたためたノートには、「86年10月ラファージに会った」とメモがあった。

ラファージよりも数年早く來日していたビゲロウは、フェノロサとハーヴァード大学の同窓で、父親がボストン美術館理事を努め、自らも外科医でありながら美術にのめりこみ、アメリカ的な世界で有数の東洋美術のコレクターとして知られるようになっていた。とりわけ、1905年以降は天心の協力を得て、浮世絵の秀作を蒐集した。その中には2006年に日本の三箇所の美術館で半年間展示された北斎の肉筆画も含まれており、長年ボストン美術館に眠っていた北斎の風景画の版木のコレクターも、ビゲロウと考えてほぼ間違いなからう。

1886年7月2日に横浜に着いたラファージは、3日後に同行の評論家ヘンリー・アダムス（1831～1918）とともにビゲロウの紹介でフェノロサや天心と知りあった。

桑原佳雄氏の『John La Farge と岡倉天心—その思想的相互影響について』に次のような検証がある。ラファージは天心から日本の古社寺、古美術品について教示を受け、参観の案内などしてもらいなどして親交を結ぶが、帰国直前になってフェノロサと天心が欧州視察の命を受けていたことを知り、初めて西欧の美術に接する2人を案じる。ラファージは若いころパリに留学して絵画を学んだうえに、その後も再度訪欧して西欧の美術工芸について知悉していたので、約1ヶ月間の船旅の余暇も利用して、西欧美術の現状、見方についてのオリエンテーションをするのである。

桑原氏によれば、フェノロサと天心は、ラファージの教え通り、ラファージの眼でヨーロッパを“視察”して帰ってきた。フェノロサ34歳、天心26（正しくは24）歳という少壮美術行政官がその年齢において到達した、東西文化（美術）の受容形態に関する見識である。

1886年の7月20日には猛暑とコレラの伝染を避けるためにラファージらは日光に赴き、8月29

日迄フェノロサの別荘に近い禅智院の離れで過ごしている。そこでは来日の第一目的であるニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジにある聖天教会の壁画の背景にする景色をすぐに見出せた。すなわち、ラファージは、日光の山と雲と平らな大地を目にして、「これこそがキリスト聖天の地である」とのインスピレーションをもった。それには、同行者から日光における自然と宗教の融合について知り、それに深く心を動かされたことも関係していた。

覚三の日光における滞在日数は不明であるが、ラファージが彼を通して日本に対する理解を深めていったのは確かである。覚三は、日本の歴史や狐憑きなど日本の民話をレクチャーしたが、二人が道教についても語りあったことは、ラファージが『画家東遊』の「道」という章で老荘思想について言及していることから推測される。たとえば、道教の最高レベルの修行者ともいえる仙人ヤリシのことや、『莊子外伝』秋水篇にある風と蛇との対話が話題になっていた。なお、ラファージは、クリーヴランド美術館所蔵の『嵐を呼ぶリシ』など小品ながら道教からテーマを採った作品を数点制作した。

もともと東洋に関心があったラファージだが、覚三との交流でそれはいっそう深められていったと考えられる。ラファージはミネソタ最高裁の壁画に孔子像を制作したとき、天心が孔子の手にした巻物に「絵事後素」という書を書いたという。道教については、ラファージの方が教え役であったとする説もあるが、覚三が少年期より漢籍に慣れ親しんでいたことから、必ずしもそうではないだろう。また、この時の論議は、覚三が20年後に著した『茶の本』の第三章に反映されていると思う。

日光での西洋美術をめぐる会話

フェノロサ、ピゲロウ、ラファージに覚三と顔が揃えば、当然のことながら、西洋美術も話題にのぼった。ラファエル前派に覚三が関心を抱き、後年の講義ノートや日誌にもみられるラスキン(1819~1900)についての知識を深めたのは、日光でのラファージとの出会いがあったからこそであろう。ラファージは、1891年にロダン(1840~1917)に傾倒し、ゴーギャン(1848~1903)や後(期)印象派にも魅せられていたが、ヨーロッパに留学した青年期に、ラファエル前派に魅せられていた。

1. 第一回欧州視察旅行(1887)

サンフランシスコからニューヨークへ

明治19年(1886年)9月上旬に京阪での古美術調査から帰京した直後の9月11日に天心は、フェノロサに随行しておよそ9ヶ月間の欧米出張を命じられた。その主な内容は、ヨーロッパにおける美術館、博物館ならびに美術教育の調査・視察であったが、アメリカでは皇族に随行する任務もあったと推測されている。すなわち、「ミカドの叔父」である小松宮一行とフェノロサ、覚三がサンフランシスコのホテルで同宿していたという記事が『サンフランシスコ・エグザミナー』という新

間に掲載されていた。

覚三にとって、ビゲロウ、ラファージ、ウィリアム・アダムスが同じシティー・オブ・ペキン号で帰国したことは、とても幸運であった。

ニューヨークでレンブラントを観る

覚三がニューヨークに滞在したのは、11月下旬から断続的にであったが、およそ一ヶ月であった。この短期間にとっても密度の濃い時をすごせたのはラファージらのおかげであった。「到着してすぐにラファージが覚三をレンブラントの銅版画のコレクションのある美術館に案内した」ということは、最も信頼できるコルティッサのラファージ伝にも記されているが、そこではどこの美術館かは明らかにされていない。現在のところ、覚三がレンブラントの銅版画を観たときの印象について記されている唯一のものがケログの『回想録』である。「岡倉は、レンブラントに魅せられて何日間かニューヨークの美術館に通った印象を岡倉が話してくれた」と記した後、「これこそが中国の大家が水墨でやろうとしていたことです。余白が意味するものは同じですと岡倉が語っていた」としている。また、三回以上通い、さまざまな面からレンブラントの銅版画を研究していたことも証言している。

ここで思い浮かぶのはフェノロサと水墨画のことである。フェノロサは、美術学校の学生たちへの講義でノートン（濃淡）の重要性についてふれていたが、画材こそ違っていても、モノクロの世界において風景や人物を表現するという点では同じであった。レンブラントの作品を鑑賞した覚三は、彼が尊敬してやまなかった雪舟（1420～1506）の作品にも思いを巡らせていたかもしれない。実際、一回は「黒と白とのアレンジ」をテーマに作品を鑑賞した。覚三が西洋画にも濃淡を重視していたことは、「欧州視察日誌」にもうかがえる。覚三は、1887年4月9日の日誌に、「〔ティツィアーノの作品も〕多くのヴェネツィア派と同様、精神性に乏しい。Notan（濃淡）良し。Notanと線の構図は巧みなり」と記している。

ギルダー夫人との西洋美術“談義”

次に見ていない作品が多くあっても、西洋美術についてのギルダー夫人との会話は、ヨーロッパで本物に接する準備としてだけでなく、覚三にとってとても大切なひと時であったに相違ない。もっとも、残念ながらそれを推測するための資料はごく限られたものであった。1887年新年早々にニューヨークを出発した覚三は、ケログには礼状を書けても、ギルダー夫人には直接手紙を出せず、ケログに『よろしく伝えて下さい』と伝言していた。

ヨーロッパに到着して一段落した三月下旬にようやく礼状を出している。

この3月23日の手紙には、覚三が日本人としてはもっとも早くに本場のクリスマスを経験した家族と体験した時の楽しかった記憶を感謝する前書きに続き、「欧州の美術が徐々に私を圧倒するようになりました」で始まる西洋美術と東洋美術の相違点ばかりではなく、「同じ欧州美術の間にもパリとウィーンでははっきりと相違点が認められます」という自分の見聞に基づく意見がやや不遜と

もとれるが、若さゆえの気負いも感じられる文章を短いながら記されている。これは1904年のセントルイス万博における「近代絵画における諸問題」という講演の出発点ともいえるかもしれない。

鑑画会での帰朝講演

木挽町の貿易公会堂で1887年11月に開催された鑑画会は、ほぼ一年振りの例会であった。前回は前年9月19日に浅草の井生村楼で開かれたフェノロサと覚三の送別の宴を兼ねたもので、フェノロサは、「訣別講演」により、二人の常任委員の海外出張による休会を告げるとともに、留守中にも制作に励むようにと会員を激励した。

フェノロサに次いで行われた覚三の帰朝講演は、翌12月の美術雑誌『大日本美術新報』50号に掲載された(『天心全集』3に再録)。視察した西洋絵画について、中国や日本の画家の例を比喩的に用いながら批評・解説するとともに、鑑画会の立場について意見を述べた。

「イタリアの一地方であるベニスのベニシヤン(ヴェネチア派)の画風のみを以って之を見るも、カルロ、クリベリーまたはバサイチの作を以ってチントレットなどの作と比較せば全く別派の感あるべし。佑清の画と伊川、晴川を同じに狩野派と称するが如し。(中略)レオナルド・ダヴィンチは気韻幽遠にして李公麟(1049頃~1106、馬を得意とした文人画家)の風采あり。フラ・アンジェリカは高雅沈密にして春日基光(春日派の祖とみられる平安時代の絵師)の後身ならんか。ペルジーノは清潔にして梅花の骨相を含み、ボチティエリは温淳にて春運みねの岫たけを出るが如し。ラファエロの秀逸、ミケランジェロの豪健活発にして龍の大地に蜿蜒するが如きは、皆吾人の愛嬌貴重の念を喚起するものなり」(画家名の表記は修正した)

この後では「近代の画家が空しく写生の奴とならざれども、画法の番卒となるに過ぎず」との表現で、写意いかえれば精神性が失われていることを指摘するとともに、古代の大家がなにゆえに大家なのかを考えなければいけないと述べている。また、フランスの美術家ギヨームが春に行った講演で日本を主として東洋の美術から新法を学ばなければいけないと強調したことを紹介している。

覚三は、この講演の本論は、フェノロサの所論の主要点である四つの立場を明快に解説することにあると考え、同時に自分を含め鑑画会が採用すべき立場を明らかにしている。

「美術教育だけでなく美術一般で東西美術のいずれを採用すべきか」という問題提起の中で四つの立場をあげている。第一、純粹の西洋論者、第二、純粹の日本論者、第三、東西並設論者、即ち折衷論者、第四、自然發達論者。そして自分の立場は第一から第三までが消去されるから第四であとし、講演を「美術は天地の共有なり。東西洋の區別あるべけんや。胸懷洞然、以って精神を發表せば必ず美術の妙に至らん。自らが信じてまた疑うこと勿れ」で結んだ。